



1-1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さん刊行 前田 禎彦 MAEDA Yoshihiko

1班では、澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『常民生活絵引』)のマルチ言語版の編さん刊行を目指して鋭意作業を進めています。対象は全5巻ある『常民生活絵引』のうち第一巻から第三巻までの3冊で、本文解説の英語訳と図に付されたキャプションの英語訳・中国語訳・韓国語訳・フランス語訳を作成しています。マルチ言語版『常民生活絵引』の編さん刊行によって、澁澤敬三を中心に日本常民文化研究所がうみだした、世界に類を見ない「絵引」(澁澤は「字引」と対比して、こう呼びました)の試みと成果を世界へと発信し、その共有財産とすることがわれわれの目標です。

翻訳は、おもに日本文化研究にたずさわる、それぞれの言語を母国語とする若手研究者の協力をあおいで進められています。現在、第二巻の翻訳はすでに終え、第一巻の翻訳も順調に進んでいます。まもなく第三巻の翻訳に取りかかるところです。

翻訳に目途のついた今、もっとも腐心しているのは翻訳の校閲作業です。図・本文解説・キャプションにおけるまったく日本に独特なコトやモノとその表現をどのように解釈し、自然で分かりやすい言語に移し替えてゆくのか。参照できる資料は思った以上にとぼしく、校閲にあたっては試行錯誤のくりかえしです。ここで確定した訳語が、今後、世界におけるひとつの基準となるわけですから、その責任は重大です。

マルチ言語版『常民生活絵引』刊行のあかつきには、世界における日本文化研究の発展に寄与するだけでなく、世界の図像研究に新しい視野と潮流をもたらすことを願ってやみません。

1-2 『日本近世・近代生活絵引』の編さん 田島 佳也 TAJIMA Yoshiya

中世の絵巻物の研究成果、『絵巻物による日本常民生活絵引』(『絵引』と略。日本常民文化研究所編)に倣い、その近世と近代編を作るのが1班の役割である。ただ、これまでの検討会と試行錯誤を通じて、近代編を作ることは時間的にも専門スタッフの面からも困難であり、そこで近世編の作成に焦点を絞ることにした。

1 絵引作成の手順

(1) 近世の北海道編と奄美・沖縄編

近世編では北海道編と奄美・沖縄編、本州編の三部作成とした。とくに前者に関しては、民族や差別などの諸問題ゆえに、『絵引』作成上、表記や表現、説明などにおいて乗り越えなければならない困難な問題があり、慎重な取り組みが必要なことから、まず試作本を作って大方の批判を受け、その後、再検討と再構成、完成を期すこととした。

(2) 本州編

本州編では、「江戸名所図会」と、金沢城下とその近郊農村を描いた「農業図会」に絞り、『絵引』作成をする。その際、作成趣旨から、できるだけ庶民生活が生き生きと描かれた情景の分析に力点をいれて解析することにした。これも(1)同様、試作本を作ることから始めるが、それは「江戸名所図会」も「農業図会」もすでに公刊・周知されており、分析対象としては便宜であること、またそうであるがゆえに、試作本の段階で大方の批判を傾聴し、より精度の高い絵引の完成を目指しやすいためであり、作業に取り掛かっている。

2 絵引作成の諸問題

ただ、『絵引』作成には大きな問題が立ちはだかっている。(1)ひとつは対象とする屏風絵などの著作権問題から、市販本掲載画像の分析をすることにしたが、分析対象画像によっては掲載図が小さく、詳細に看取できないことである。(2)『絵引』作成には対象画像の時代を専門とする、多岐にわたる分野の専門家の英知を集め、解析する必要があるが、そうした編成が予算上の問題か、実現できないことである。近年、黒田日出男氏らの研究や東大史料編纂所や歴史民俗博物館などによる画像分析が盛んである。そこでは多岐分野の英知を集め、解析を試みている。それほど、画像の解析は一筋縄ではいけないということの証明でもあるが、本学COEでは学部本務の傍ら、2~3人に『絵引』作成が要求されている。今年度から協力者1人の追加が認められたが、専門家の少ないなかで『絵引』作成がどの程度までできるのかが問われている。

1-3 『東アジア生活絵引』の編さん

鈴木 陽一 SUZUKI Yoichi

1 概要

- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像の分析と絵引き作り
- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像のレファランスとする図像資料の入手、分析、データ処理
- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像のレファランスとする文字資料の解読とデータ処理
- 成果のデジタルデータ化と一部の公開

2 具体的活動

- 定期的研究会の開催
- レファランスデータ収集のための調査旅行（北京・故宮、台北・故宮、ソウル）
- 外部講師を招聘しての勉強会
- 「姑蘇繁華図」の風景と実景との比較調査、及び蘇州風俗調査

3 レファランスとして活用する予定のデータ

図像類

康熙、乾隆期の「南巡図」、清末の雑誌、新聞の挿絵（『點石齋畫報』、『營業寫真』）、清末の絵葉書、土産用絵画、朝鮮半島における風俗図と関連資料

文字類

古 典：『清俗紀聞』、『清嘉録』など、中国及び朝鮮の近世風俗に関するもの
現代文：観光案内、風俗資料など

2-1 身体技法の比較研究

廣田 律子 HIROTA Ritsuko

第2班の研究課題である「身体技法および感性の資料化と体系化」では、平成17年度は、身体技法の領域で、川田が生業活動における身体技法を、用いられる道具との関係で、モンゴルとフランスで現地調査した。これに対し山口、夏、廣田は、人々の被災招福といった意図が色濃く反映される、狭義の実用を離れた儀礼、祭祀、舞踊における身体技法を、中国と日本について調査し、モーションキャプチャなどの方法により記録を行なった。中でも山口は人形を通して、日中の裃に関わる身体技法の研究を進めている。夏は中国ナシ族の求寿儀礼における宗教者の動きについて調査研究を進めている。廣田はモーションキャプチャで得た日中の民俗芸能および伝統芸能のデータを分析することで、芸能研究の新たな研究方法を見出そうとしている。感性の領域については、川田は前年度に引き続きとくに嗅覚と香水の面で、フランスでの調査で研究を前進させることができた。

その成果の一部は、11月の国際シンポジウム「非文字資料とは何か 人類文化の記憶と記録」やその他の学会（中国江西国際離文化学術討論会、お茶の水女子大学比較日本学研究センター第7回国際日本学シンポジウムセッション、高麗大学校 民族文化研究院 国際学術大会 18世紀東アジアの公演文化）等の場において示し、また平成17年度の『年報』をはじめとした報告書にそれぞれ発表した。

今後は収集した資料の整理分析を進め、研究成果の公開に向けて多面的な利用に資するように力を注いで行きたい。当面川田は、『年報』3号に、「感性の人類学のための予備的覚え書き」で提出した新しい構想を、事例研究によって具体化して随時発表する見通しである。山口は、今後の課題として、裃とその対象・方法 人形祭祀の歴史と現況 オニ・クグツ・サルガクの語源問題 鐘道・金太郎・桃太郎の形成、などを追及してゆく見通しである。夏は、引き続きナシ族の宗教者の動きについて分析を行ない、廣田は、跳躍回転の動きに注目しながら、中国の儺舞と日本の花祭りとの能の演者の動きに関する分析結果を公開するための方法を模索する見通しである。



2-2 用具と人間の動作の関係の分析

河野 通明 KONO Michiaki

用具や道具・民具とよばれるモノ資料は、本来の機能に関する情報以外にその地域の歴史・民俗情報をゆたかにもっている。この点で「非文字資料」として注目されるわけであり、この非文字情報を引き出すには広域の比較調査が必須となる。そこで2003～4年には東北6県を調査し、2005年は中部地方調査を始めたが、まだ未調査地域を残したまま、残り2年の整理の段階に入った。そこで若干の補足調査をしつつ、1981年以来つづけてきた西日本の調査成果をも援用して、民具という非文字資料の人類文化研究のための有効性の検出と方法論の確立を目指したい。

民具の非文字資料としての有効性については、過去の西日本調査からは7世紀の大化改新政府による中国系長床犁導入政策を復原できており、COEの東北地方・中部地方調査からは、東北地方には5世紀の伝来期に馬鍬は伝わっていなかったこと、その後7～9世紀の城柵建設にともなう柵戸として中部・関東地方農民の入植にともなって、中部・関東系の板鉤引手馬鍬が持ち込まれたらしいことなどが見えてきている。視野をアジアに広げると、昨年国際シンポジウムでは、雲南大学の尹紹亭氏は在来犁の形態比較から中国における民族移動を復原しており、これを受けて本年10.28(土) 29(日)の第2回国際シンポジウムでは、「犁の形態比較から東アジアの民族移動をさぐる」というテーマを設定して、過去2000余年の東アジアの民族移動の復原に取り組むこととした。

このように20世紀の民具から2000余年もの過去にさかのぼることが可能なのは、民具は壊れて個体は更新されながらも形は変わらず継承されるという性質にある。ただこれにも消費生活用具に比べて生産用具は変わりにくいなどの法則性が看取され、その検出と体系化にもとづく「民具からの歴史学」の方法論の確立が、この部門での「人類文化研究のための非文字資料の体系化」になろう。それを2班共同の報告書にまとめることとしたい。

また人間の動作との関係では、木摺臼の作業姿勢から、朝鮮半島で立位だったものが日本伝来後、畿内で座位用に改良され、これが東北北部に伝わると立位にかわり、南部では近世中期以降に腰掛け姿勢があらわれ普及するという興味深い事実が確認できた。これは日本列島の過去の民族的多様性の反映である可能性もあり分析を急いでいる。

3-1 景観の時系列的研究

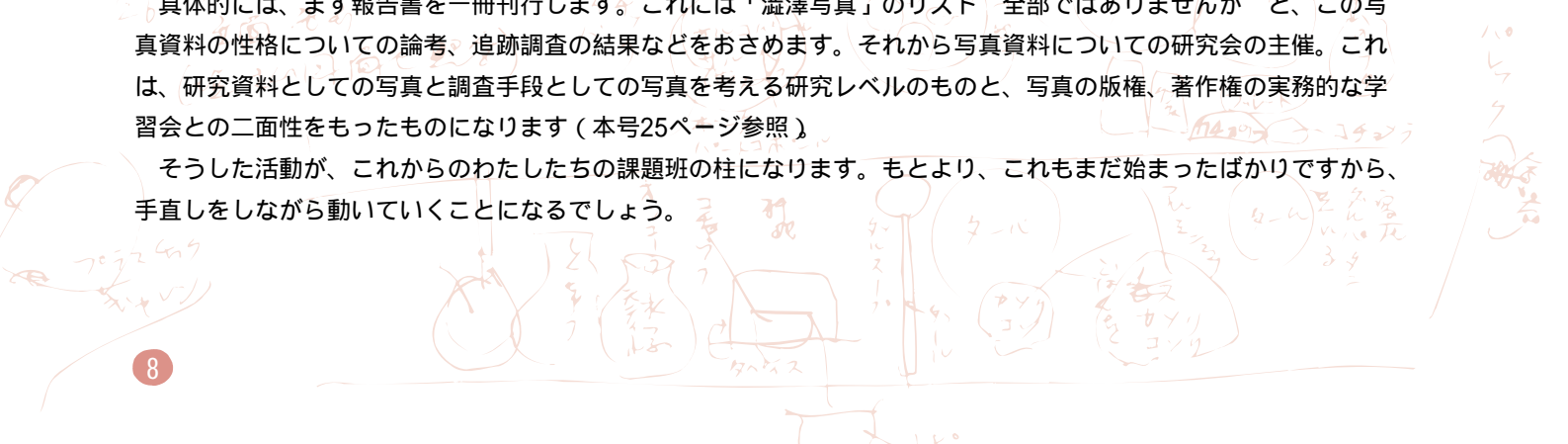
香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro

今後2年間の作業の軸は、日本常民文化研究所所蔵のいわゆる「澁澤写真」の一般公開にむけての作業と、この写真群の資料としての可能性の模索及びその提示になります。もとより、この写真の所蔵権は同研究所がもっていますが、一般公開の実作業自体は同研究所がイニシアティブをもっておこなうべきで、わたしたち一課題班の立場としては、それについて実行可能で、現段階でベストと思われるプランを作成し研究所に提示し、一部のサンプル例をつくり、その実施にむけて動くところまでになります。研究所が写真を所蔵しているといっても、これにはネガがなく、また澁澤敬三がさまざまにサポートして撮影させた写真とはいえ、そのサポートのありかたは一樣ではなく、研究所がどういった性格の権利をもっているのか、どのような形で一般公開が妥当なのか、そうした点から検討していかなければなりません。

また、これまでの三年間、写された写真については、八久保厚志先生を中心としたメンバーが、精力的に追跡調査をおこなってきました。これをひとつの基盤として、前述した二種類の性格の異なる作業を進めていくつもりです。

具体的には、まず報告書を一冊刊行します。これには「澁澤写真」のリスト 全部ではありませんが と、この写真資料の性格についての論考、追跡調査の結果などをおさめます。それから写真資料についての研究会の主催。これは、研究資料としての写真と調査手段としての写真を考える研究レベルのもの、写真の著作権、著作権の実務的な学習会との二面性をもったものになります(本号25ページ参照)

そうした活動が、これからのわたしたちの課題班の柱になります。もとより、これもまだ始まったばかりですから、手直しをしながら動いていくことになるでしょう。



3-2 環境認識とその変遷の研究

香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro

COEの五年間で、当初ふたつの軸となる研究作業を想定、計画し、環境認識という概念について考えていこうとしていました。ここで述べるのは、そのうちのひとつのものになります。(もうひとつの軸となる作業は、調査対象地の災害や、調査スタッフの問題からその進行ははかばかしくありません。そのことについては、また別のところでご報告いたします。)

これから二年間は、鶴見大学の河野眞知郎先生とのコラボレーションで、鎌倉に焦点をしばって、考古学と民俗学の立場から環境の変遷とその認識について考えていこうと思います。と、いっても短い期間に古い歴史をもつ地域を対象にしますから、そのテーマや手順はある程度しぼりこんでいます。河野先生は、所蔵されている未整理の諸資料の、整理、分析をとおして鎌倉の環境の変遷についてあらたな問題提起をされる予定で、わたしは中世の武家政治の中心地であったという先入知識をいったん措いて、逆にひとつの地域として、この地の現在の地割図の分析を試みようと思います。そして、そのふたつの作業をすりあわせて、歴史的環境の概念を考える、といった作業を試みてみたいと思っています。さらにこれまで空撮した全国の谷のむら二千コマほどの写真も参考資料としつつこの地域について考えたいと思います。河野先生はこれまで鎌倉について、たいへんユニークで厚みのある業績をあげられてきており、私自身は、民俗の景観伝承論の立場から胸をおかりする、といった形の作業になると思います。

その成果は、まず、年次報告書において提示したいと考えていますが、来年度には、それ以外の形での発表、発信ができないかその試行を考えたいと思っています。そうした発表、発信をふくめて、試行錯誤の度合いの高い作業になるはずで。

3-3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

北原 糸子 KITAHARA Itoko

本グループは、大きく人間活動に関する研究グループと災害痕跡解読に関するグループに分かれる。それぞれのグループともに、2006年度の研究活動はこれまでの現地調査についての整理、分析を加え、公開に向けたデータベースの構築に重点を置く。以下3グループはともに、「非文字資料」として絵葉書、写真、グラビア雑誌などをデータベースの素材とするが、これらの資料の有効性、補完関係となる資料との関係などについては、それぞれのデータベースの作成意図、実際の成果などを踏まえた上で、グループ内外で討議を進めることとしたい。

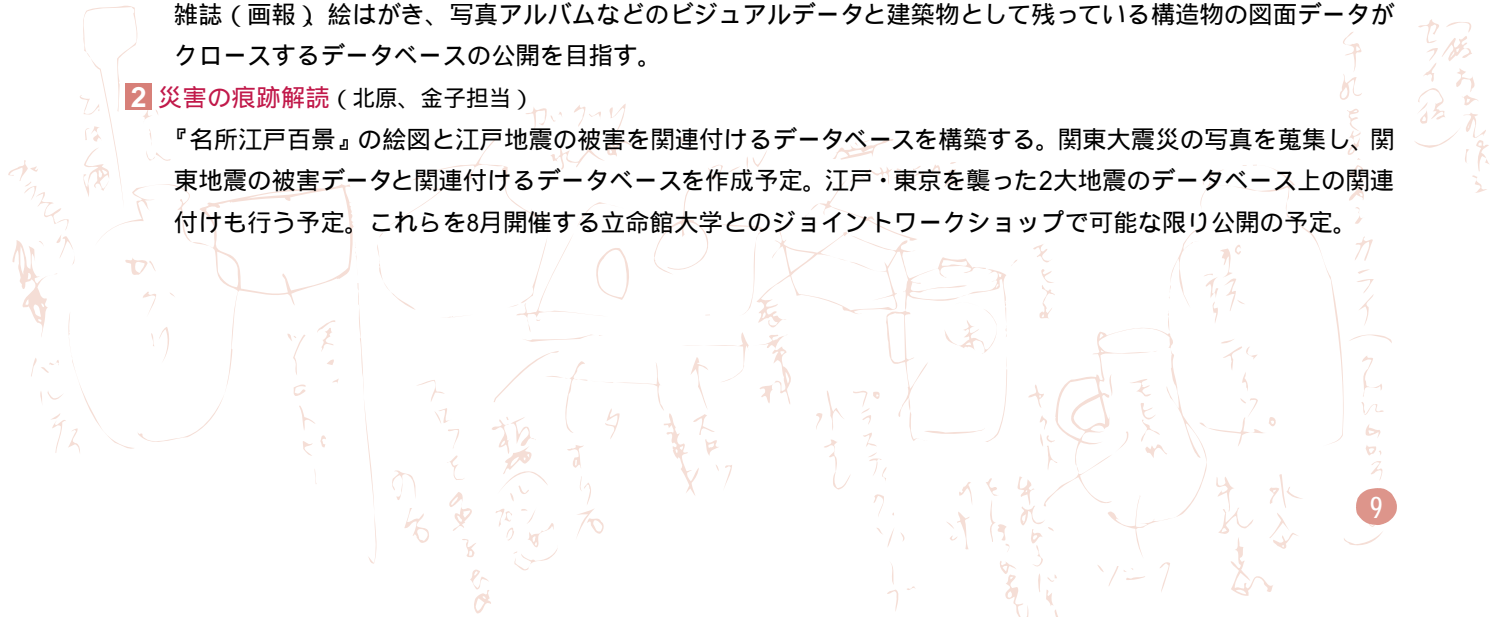
1 人間活動に関する研究グループ

海外神社跡地調査研究(津田、中島、三鬼担当)は初年度以来引き続き文献、資料、絵葉書、写真などの資料に基づき、データベースを作成する。また、旧満州地域神社跡地について不十分であった調査の補充を行う。

日本租界研究(大里、孫担当)は戦前の中国・朝鮮における「日本租界」の形成、発展、消滅の歴史的経緯を明らかにする。昨年度刊行した『中国における日本租界』(御茶ノ水書房)の成果を踏まえ、2006年度はグラビア雑誌(画報)絵はがき、写真アルバムなどのビジュアルデータと建築物として残っている構造物の図面データがクローズするデータベースの公開を目指す。

2 災害の痕跡解読(北原、金子担当)

『名所江戸百景』の絵図と江戸地震の被害を関連付けるデータベースを構築する。関東大震災の写真を蒐集し、関東地震の被害データと関連付けるデータベースを作成予定。江戸・東京を襲った2大地震のデータベース上の関連付けも行う予定。これらを8月開催する立命館大学とのジョイントワークショップで可能な限り公開の予定。





4 地域統合情報発信

佐野 賢治 SANO Kenji

従来の第4班統合情報発信班は今年度より、地域統合情報発信班・実験展示班・理論総括班に発展的に分かれ、研究成果の公開を図ることになった。地域統合情報発信班は、画像・民具・身体技法・景観資料をそれぞれ対象とした、1班から3班の研究成果、画像データ・ベース、モーションキャプチャ分析、景観の経年変化解析などの情報処理・発信法を福島県只見町の該当資料により組み合わせ、山村に生きる人々の生活の営みを統合・構造的に体系化する。その方法として、高精細ハイビジョンカメラ映像を駆使したデジタル・コンテンツ化に取り組み、インターネット上で情報発信するシステム開発に取り組む。

具体的に、民具を中核にすると、会津地方には著者、年代、対象地が明確な農書として日本最古の『会津農書』（貞享元年1684）が残る。農民に普及させるため絵農書、歌農書も作られた。一方、只見町には、貞享2年（1685）の『会津郡伊北和泉組風俗帳』が残り、当時の年中行事や農作業の様子が記されている。これらの文書史料や画像に加え、その製作技法や使用に伝統が残る農具や野良着を使用し、かつての農法を復元する。

画像は、スーパー・ハイビジョン、高精彩解析度をともなったデジタル・コンテンツ化により、ズームアップ・ダウン操作で、鳥瞰的構図から微細な観察まで、従来では及びもつかない視角から把える。絵図・地図と実際の風景をクロスさせ、景観の通時の変化を追うことや、農作業における身体の動きの特徴はモーションキャプチャに連動させることで理解を図る。戦後の電源開発、圃場整理事業などによる集落、耕地の景観変化と、それに伴う生産・生活の変容を项目的に入力し、GIS（地理情報システム）なども援用し、相互関係が立体的に理解できるような画面構成を試みる。

約8,000点余の民具はすでに収蔵展示されているが、記録カードを写真付きでデジタル入力し、特徴のある民具についてはその製作や使用の実態を動態画像化、デジタル・コンテンツ化し、拡大縮小も自在に操作できるようにする。パソコン上で、製作者や使用者に質問を書き込み、回答もできる工夫もする。さらに、それぞれの民具の分布、呼称の一般的情報から、研究文献などの検索ができるクリック・ポイントを設け、関係する国内・外の博物館などのリンク先も整える。従来の箱物としての資料館は、実物資料の収蔵と展示、講演会など人の集まる空間としての意味が第一となり、情報の発信と集約という点において家庭や職場にある小さな函、パソコンがインターネット博物館となり、地域を越えて、国内・外を相互に結ぶことによって大きな“博情館”、情報発信システムとなることを目標に活動していく。

5 実験展示

中村 ひろ子 NAKAMURA Hiroko

実験展示班は研究成果を次の二つの形で情報発信することを担い、今年度新たに編成された。

1 実験展示

画像・身体技法・環境の各資料を活用し、研究成果を統合して展示という形で発信するために、展示テーマとして「身体の記憶 非文字の世界」（仮称）を選んだ。私たちの日常的な行為の多様性を環境との関連で把握し、歴史的展開の中に位置づける試みである。

2007年秋、展示空間となる本学の常民参考室に非文字資料のもつ豊かな世界が広がり、新たな発見に出会える場となるとともに、視覚障害をはじめとする展示にかかわるさまざまなバリアを越える場となることを目指して、展示の企画から設計、実施、展示評価などの各過程に研究者、博物館の学芸員、展示制作の専門家、市民、学生、そして障害をもつ方々といった多くの方々の参加をえて、ともに展示を作り上げていきたいと願っている。

2 高度専門職学芸員養成方法の開発

画像・身体技法・環境資料をはじめとする非文字資料の調査研究、収集保存の今後の担い手として博物館、学芸員に期待するところは大きい。勿論今博物館、学芸員に求められているものはそれにとどまらずより多様で高い専門性であるが、学芸員養成の現状は必ずしもそれに応じるに十分とはいえないように思う。そこで、高度専門職としての学芸員の養成方法を「大学院における学芸員養成カリキュラム」という具体的な形で発信するために、養成の現状の把握を踏まえ、学芸員の専門性とは何かの論議を多くの方々と積み重ねていきたいと思っている。